

## 「そうぞうする力」を発揮し、つくりだす喜びを感じる子どもの育成

小 学 校 古 鎌 幸一、藤野由起子、是澤 雅代  
研究協力者 福井 一真、秋山 敏行（愛媛大学）

### 1 主題設定の理由

#### (1) 図画工作科における〈自己効力感〉

子どもは、色や形、材料、言葉などから直感的に思い付いたり想像したりしたことを口々に語りながら、あるいは自己内対話を繰り返しながら、表現・鑑賞し、造形言語をつないで自分の内在世界を表出する。そして、自他の表出したもの・ことから新たなイメージを獲得したり、そこへ向かってさらに表現・鑑賞を進めたりしながら、自己実現を図る。このように、ひたむきに対象にかかわり、その中で自分の資質や能力が十分に引き出され、更新され、自己実現が達成できたとき、子どもは「つくりだす喜び」を感じ、「もっとやりたい」「やってみよう」という思いを抱く。このような姿に、私たちは〈自己効力感〉の高まりを見ることができる。

しかし一方で、「思い付かない」ことに悩んだり、始めに思い付いたことを試してしまうとそこで思考が停滞してしまったりすることがよくある。また、うまくいかないことに出合ったときに、すぐに諦めてしまうこともある。その結果、表現することへの苦手意識を強める子どももいる。このようなある種の「行き詰まり感」はなぜ生じるのか。その原因を、私たちは「そうぞうする力」の育ちにあると考える。

#### (2) 図画工作科における「そうぞうする力」

私たちが考える「そうぞうする力」とは、次のような「想像力」や「創造力」を内包する、総合的な力である。

##### 『想像力』

- 色や形などから直感的、感覚的に「○○みたい」「こんなことができそう」「こんなことを表現したい（している）」と感じたり、思い付いたりすることができる。
- つくり、つくりかえ、つくる営みに着目した発想の広がり、すなわち「イメージ」をつなぎながら「ストーリー」に発展させていくことができる。

##### 『創造力』

- 「考える」と「つくる」をつなぐ創造的技能の深まり、すなわち経験知や情報知などから柔軟に発想し、創意工夫したり他者と協働したりしながら新たな価値あるものを生み出す。

子どもは、身の回りのもの・こととの出会いから、直感的に何かを感じ取ったり、あるイメージを思い描いたりする。それらの多くは個々の経験に基づくものであり、成長するに連れて、内在するイメージを関連付けたり、解体したりしながら、新しいイメージを創り出すようになる。また、直感的な思い付きや経験に基づく予測に従って、既知の知識や技能を組み合わせながら、創意工夫、試行錯誤を繰り返し、そのイメージを具体化、具現化しようとしたり、課題を解決しようとしたりする。

しかし、学年が上がるに連れて、感性を豊かにする経験や、学習による知識・技能の個人差が大きくなったり、興味・関心の傾向に顕著な偏りが見られたりするようになる。そこで、発達段階に応じて、子どもの生活経験や造形的経験を豊かにし、「想像力」を高めていくこと、そして基本的な知識・技能を習得・活用する機会を保障することによって、「創造力」を高めることが必要であると考えられる。また、自意識が強まるに連れ、他者を過度に意識するようになることから、他者とのかかわりの中で、自他の違いを認め、それぞれのよさを尊重したり生かしたりする経験を積み重ねていくことも、「そうぞうする力」を育む上で、大切であろう。

#### (3) 「未来を拓く力」を育む〈自己効力感〉と汎用的な資質・能力

発達段階に応じて子どもの「そうぞうする力」を十分に育み、子どもが自信を持ってそれを

発揮するとき、子どもは心地よい充足感や達成感を味わうことができる。自分や自分の行為を肯定的に捉えることができれば、次なる快の予感や自信につながっていくことが期待できる。すなわち、「そうぞうする力」と〈自己効力感〉とは、互いにかかわり合いながらスパイラルに高まっていくということである。このような中でこそ、子どもの「そうぞうする力」は図画工作の領域を超え、生活の中で生きて働く力に昇華するのではないかと考える。〈自己効力感〉に支えられた「そうぞうする力」は、これから子どもが新しいものや未知の世界に出合うときに、それに臆することなく向き合い、創意工夫したり他者と協働したりしながら、試行錯誤し、自分らしいかかわりや生き方を主体的に見付け実践していくことの原動力となる。したがって、図画工作科において培われる「そうぞうする力」は、汎用的な資質・能力となって未来を拓く子どもを支えるものとなると考える。

## 2 〈自己効力感〉が高まる図画工作科の授業づくり

### (1) 〈自己効力感〉が高まる指導と評価の方針

図画工作科において、〈自己効力感〉が高まっている子どもの姿を具体的に想定しながら、指導と評価の方針の見直しを図り、次のように整理し直した。

学習過程	指導（・）と評価（○）の方針	〈自己効力感〉が高まっている子どもの姿
出会い	<ul style="list-style-type: none"> <li>強い疑問、必要感、興味・関心、快の予感などを生み出す題材との出会いを設定する。</li> <li>○ 感性や想像力などを働かせ、造形的視点での感動や驚き、期待感などを得ているかを子どもの言葉や行為から見取り、評価する。【力・心】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新たな題材に対して興味を持ち、主体的、前向きにかかわろうとしている。</li> <li>自ら主題を見付け、表し方や手順などの見通しや自己実現の達成の予感を持ち、前向きに取り組もうとする。</li> </ul>
追究	<ul style="list-style-type: none"> <li>材料や環境、他者などのかかわりが生まれ、深まるような状況設定や環境設定を行う。</li> <li>新たな意味や価値をつくり出す喜び、楽しさを感じられるような指導言を工夫する。</li> <li>○ 感性などを働かせて表したいことを考えたり、表し方を工夫したりすることができているかを子どもの言葉や行為、行為の総体としての作品から見取り、評価する。【力】</li> <li>○ 他者などのかかわりを通して、新たな表現の可能性に心躍らせたり、挑戦しようとしていたりしているかを、子どもの言葉や行為、行為の総体としての作品から見取り、評価する。【心】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>経験知や情報知を基に柔軟に発想し、創意工夫する。その結果に納得し、自分の行為に価値付けをしながら試行錯誤し続けている。</li> <li>材料や環境、他者などのかかわりながら、新たな気付きや発見を得て、自分のイメージを更新しながらつくり続けている。</li> <li>自他の思いや表現の同異に関心を向け、共につくり出す楽しさや喜びを感じながら、発展的にイメージを広げている。</li> </ul>
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分のよさや力の伸びを実感したり、自分の生活や社会とのつながりを再認識したりすることができるよう指導言を工夫する。</li> <li>○ 造形的なよさや美しさ、表したいことや表し方について改めて考え、自分の見方や考え方を深めているかを子どもの言葉や行為から見取り評価する。【力】</li> <li>○ 更なる発展性や新たな造形的な創造活動に向かおうとする意欲の高まりを子どもの言葉や行為から見取り、評価する。【心】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動の過程を振り返り、自分の行為の結果に納得し、満足したり、次への展望を持ったりしている。</li> <li>自分の学びと、生活や社会とのつながりを見詰め直し、新たな気付きを得たり、活動意欲を高めたりしている。</li> </ul>

図画工作科では、子どもの活動や表現の見取りを基に、幾度となく対話を繰り返しながら、言語と造形の関係性を探り、子どもの思いに寄り添う指導と評価の在り方を模索することを重

視する。意図的に対話の中で用いる主な指導言（評価言）は、次の通りである。

共感と賞揚	子どもの「こだわり」が表現されているところを見取り、その表現を受け止め、共感的な言葉によって具体的に励まし、評価する。子どもが自己実現の喜びを実感したり、自分の行為や表現の価値を自覚したりすることができるようにする。
表現意図の聞き取り	子どもが色や形で表しているもの・ことは、内在しているイメージのごく一部であるにすぎない。子どもが語る言葉は、子どもの表現の大切な一部である。子どもの造形行為、その総体としての作品を注意深く見て、子どもの語る言葉に耳を傾け、あるいは子どもの語りを引き出すことによって、子どもの思いと表現の関連性を明らかにすることができる。
技法や材料の提案	子どもと学習対象とのかかわり合いの状況を見取りながら、新しい材料や技法を提案することは、子どもが「そうぞうする力」を発揮し新たな表現をつくりだすきっかけとなる。また、経験の中から、既知の技法や材料の使い方について気付かせることも同様である。
視点の提案	同じもの・ことでも、見る角度を変えれば全く違う可能性が見えてくる。テーマや表現方法に対して視点を提案すること、時に常識を覆すような見方、考え方を投げ掛けることも、子どもの「そうぞうする力」を引き出すきっかけとなる。
他者の表現や造形活動との関係付け	他者とのかかわりによって、子どもは自他の表現のよさを見詰めたり、感じ方の違いを捉えたり、新たな表現のヒントを見付けたりすることができる。他者とのかかわりのきっかけを与えることは全体や個の意識を高める指導の一つである。

評価については、子どもの姿を、資質・能力といった「【力】の高まり」と、学びへの積極性や主体性といった「【心】の動き」の二点から見取る。短期的評価としては、授業における子どもの言葉や行為、そして「図工日記」における自己評価の数値や記述から見取る。中・長期的評価としては、題材終了後の「振り返りシート」や学期末の「あゆみ」を活用する。これらの評価と指導を一体的に行い、【力】と【心】が共に高まっていくことを目指す。

## (2) 教科等横断的な題材構想モデル

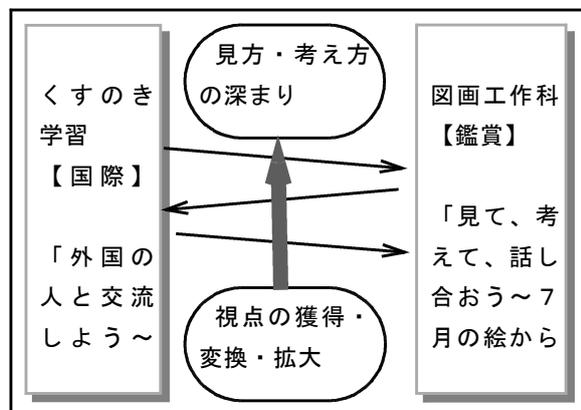


図1 接続型（第4学年）

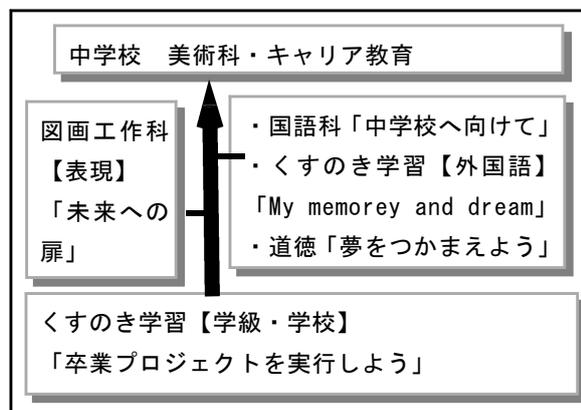


図2 プロジェクト型（第6学年）

図1、図2はともに、「C 学習内容の関連性」及び「D 資質・能力の関連性」を重視した題材構想の例である。

図1の題材構想においては、ハワイという共通の学習材を用いてくすのき学習【国際】と図画工作科の学習を接続していくことで、双方における視点の変換や拡大を図り、見方・考え方を深める。そのことによって、双方の学習のねらいがよりよく達成されることが期待できる。

図2の題材構想においては、くすのき学習を軸に、「未来」を視点として関連を図ることによって、子どもの「思い」や「思考・判断・表現」する力が、総合的・継続的に高まり、よりよく発揮されていくことが期待できる。特に図画工作科においては、造形活動と言語、あるいは言語化されない意識との往還が繰り返されることによって、子どもがそうぞうする力をよりよく発揮し、豊かに表現することができる。卒業を迎えた子どもが、〈自己効力感〉を感じながら、未来への新たなステージに踏み出すことを期待して構想したものである。

（藤野 由起子）

